

Discussion Paper Series

RIEB

Kobe University

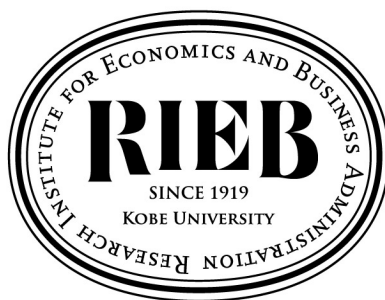
DP2016-J09

子育てのあり方と親子関係－日本における実証研究－

西村 和雄

八木 匡

2016年12月28日



神戸大学 経済経営研究所

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 2-1

子育てのあり方と親子関係—日本における実証研究—

西村和雄（神戸大学）*

八木匡（同志社大学）**

要旨

本稿では、子供時代に親から受けた子育てのあり方が親とのどのような親子関係をもたらしているかを実証的に分析して、親を肯定的に見る子供が、家庭を持つこと、結婚すること、子どもを持つことに対して肯定的となることを検証する。子供時代に親から受けた子育てを、支援型、厳格型、迎合型、放任型、虐待型に分類すると、支援型の子育てを受けた子供は、理想の男性（女性）が父（母）であること、婚姻率、希望する子供の数のいずれも、他のタイプの子育てを受けた子供よりも高い数値を示している。これは、支援型の子育てを受けた子供が、将来において、他のタイプの子育てを受けた子供よりも、所得、幸福感、学歴で、高い成果を上げているという、西村と八木（2016）による研究結果であるとも合致している。

キーワード：子育てタイプ、支援型、理想の男性、理想の女性、婚姻率、希望する子供の数

JEL Classification Codes : I21, I26

1. 序文

子育ては、子供にとっては、親との結びつきの在り方、そして、将来、社会とどう関係す

本稿は、独立行政法人経済産業研究所におけるプロジェクト「日本経済の持続的成長のための基礎的研究」の一環の成果であり、また、JSPS 科学研究費基盤 S #15H05729 および基盤 B #16H03598 の支援を受けた研究成果である。

* 神戸大学社会システムイノベーションセンター特命教授

** 同志社大学経済学部教授

るかを決定する。子育ての方法が異なれば、子供の自尊感情、規範意識、自制心なども異なり、そして教育的効果も異なってくる。子育ての方法については、昔から、多くの議論が行われている。子育てのタイプを分類した理論としては、アメリカの発達心理学者 Baumrind (1967, 1968) によるものがよく知られている。Baumrindは、子育てのタイプを権威型 (Authoritative) 、専制型 (Authoritarian) 、迎合型 (Permissive) の3つに分け、その中で、最も効果的なのは、権威的な親であるとした。その後、Maccoby and Martin (1983) はBaumrindの3つのタイプに、4つ目のタイプである放任型 (uninvolved) を加えた。

親の子育てのタイプが子供のパフォーマンスに与える影響に関する最近の研究として、444の中国系アメリカ人家庭の調査をしたKim et al. (2013)によるものがある。Kim et al. は、子育てを、支援型 (Supportive) 、厳格型 (Tiger) 、放任型 (Easygoing) 、虐待型 (Harsh) の4タイプに分けた。厳格型をTigerとよぶのは、Chua (2011)が厳格な子育ては子供の成功に役立つと問題提起をし、厳格な子育てをする母親を“Tiger Mother”と呼んだからである。

なお、Kim et al. (2013)に先行して、子どもの育て方とその影響について、多くの研究蓄積が存在している。例えば、Ge et al. (1996)およびBarber (1996)は、子育てと子どもの鬱症との間の関係性を決定する重要な要因を分析した。

また、親子間関係に関しては、Fuligni and Source (1999)は、家族との関係が学習効果に与える影響を分析した。Meares, Blazeovski, Bybee, and Oyserman (2010)およびSriram and Navalkar (2012)らの研究では父親および母親に対する理想像がどのような側面において形成されているのかを実証的に明らかにしている。

また、親の子育ての在り方は子供の規範意識の形成とも関係する。我々は、西村他 (2016)において、モラルの高い労働者が労働市場において高い評価を受けていることを示した。規範意識の形成は企業内での信頼関係を高め、生産性を高めていると考えられる。実際、信頼形成が経済活動の効率性を高めるという議論も行われている (Zak, 2013)。

本稿では、1万人から回答を得た日本での調査データを用いて、日本人の親に多い子育てのタイプと子供の成人後の結果、親子の関係性に与える影響を分析する。明治時代初期に日本を訪問した外国人の書籍、Bird (1880)、Morse (1885)、Netto and Wagener (1901)などでは、日本人の子育てについての感想が述べられている。Netto and Wagenerでは「日本ほど子供が、下層社会の子供さえ、注意深く取り扱われている国は少なく、ここでは小さな、ませた、・・・子供が結構、家族全体の暴君になっている。」と述べられている。地域社会が子供を大切にしていることがうかがえるが、見方を変えれば、当時の日本では子供を甘やかしていたとも言える。

西村・八木(2016)では、子育ての方法が子どもの人格形成とパフォーマンスに与える影響について、就業後の所得、幸福感、学歴に与える影響を男女の合計のデータを用いて明らかにした。本稿では、就業後の所得、幸福感、学歴に与える影響を男女別のデータで再検討し、さらに、子育てのあり方が親子関係にどのような影響を与えているかに関して、実証的に分析する。それぞれの子育てタイプにおいて構築される親子の関係性は、例えば、その子育てタイプで育てられた人と他のタイプで育てられた人の違いを浮き彫りにしてくれるであろう。

具体的には、親を肯定的に見る子供が、家庭を持つこと、結婚すること、子どもを持つことに対して肯定的となることを検証する。良好な家族観の形成は、前向き思考を高め、不安感を軽減していることが考えられる。

第2節は調査の概要を説明する。第3節では、回答者を男女別に分けたうえで、子育てタイプと成人後の達成度への影響を分析する。第4節では、理想の男性(女性)が父(母)である人の比率を、子育てタイプ別に比較し、理想の男性(女性)が父(母)であることが、婚姻状態と希望する子どもの数にどのような違いをもたらしているかを分析する。第5節は、親を扶養する意識、親の専制的態度が子供に与える効果、怒りと愛情表現を通じた回答者とその子供との関係について、子育てタイプとの関連で分析する。

2. 調査概要

本調査は、独立行政法人経済産業研究所のプロジェクト「日本経済の持続的成長のための基礎的研究」の一環として、楽天リサーチ株式会社を通じて行った Web 調査である(2016年1月)。楽天リサーチの有する約230万人の母集団モニターの中から338,707人を無作為抽出し、回答を依頼した。最終的に、1万人からの回答を得ている。以下では、男女別に属性を中心に、主要変数について記述統計量および分布を示す。

まず、性別分布であるが、男女とも5000人の標本を得ている。記述統計は、表1で示された通りであり、男性の54.9%、女性の62.3%が既婚となっている。課税前平均世帯所得は表2のように、男女間で差が無いが、税込み労働所得は男性よりも女性で大きく下回っていることが示されている。表3では、子どもの有無を示しており、男女共に標本の約半数が子どもを持っていることが示されている。表4では、標本の学歴分布を示しており、大卒以上の学歴を持つ者の比率は、男性で54.6%、女性で33.5%であることが示されている。

表1 婚姻状態 (%)

	男性	女性
未婚	38.8	27.5
既婚	54.9	62.3
離婚・死別	6.2	10.3
合計	100.0	100.0

表2 所得分布統計量

		年齢	世帯課税前収入 (男性) 単位万円	世帯課税前収入 (女性) 単位万円	税込み労働所得 (男性) 単位万円	税込み労働所得 (女性) 単位万円
人数	有効	5000	5000	5000	5000	5000
	欠損値	0	0	0	0	0
平均値		45.85	547.20	546.82	414.72	184.02
中央値		46.00	500.00	500.00	300.00	100.00
標準偏差		13.18	353.22	350.91	321.78	222.96
最小値		23	0	0	0	0
最大値		69	2100	2100	2100	2100

表3 子どもの有無 (%)

	男性	女性
子ども有り	49.8	54.9
子ども無し	50.2	45.1

表4 学歴 (%)

	男性%	男性累積%	女性%	女性累積%	男女計%	男女計累積%
中学校	2.3	2.3	1.7	1.7	2.0	2.0
高校	28.0	30.3	30.4	32.2	29.2	31.3
専門学校	9.8	40.1	12.7	44.9	11.3	42.5
短大・高専	5.3	45.4	21.6	66.5	13.5	56.0
大学	47.5	92.9	30.8	97.3	39.1	95.1
大学院	7.1	100.0	2.7	100.0	4.9	100.0
合計	100.0		100.0		100.0	

3. 子育てタイプ

本調査では、Armsden and Greenberg (1987)の研究を基礎に作成した 20 項目の質問で子供時代の親との関係をたずね、「無関心 (関心)」、「信頼」、「規範」、「自立」という四つの因子の抽出を行った。「無関心」については、マイナスの係数値を持っている項目であれば、「関心」を表している。各質問項目に対しては、5 段階のリッカートスケールで回答してもらい、「まったくそう思わない」に 1、「あまりそう思わない」に 2、「どちらともいえない」に 3、「ややそう思う」に 4、「とてもそう思う」に 5 の点数を与えている。

以上に加えて、「子どものころ、親や身近な大人に本を読んでもらった」、「子どものころ、親や身近な大人に勉強を教えてもらった」、「子どものころ、家族そろって遊びに行った」、「子どものころ、夕食を子どもだけで食べた」という質問に対して回答してもらい、「全くない」に 1、「あまりない」に 2、「少しある」に 3、「よくある」に 4 の点数を与え、回答数値を主因子法による因子分析にかけ、「時間共有の経験」の因子を抽出した。

そして、「子どものころ、親以外の身近な大人に叱られた」、「子どものころ、親にたたかれた」、「子どものころ、親に叱られた」という質問に対して回答してもらい、「まったくそう思わない」に 1、「あまりそう思わない」に 2、「どちらともいえない」に 3、「ややそう思う」に 4、「とてもそう思う」に 5 の点数を与え、回答数値を主因子法による因子分析にかけ、「叱られた経験」の因子を抽出した。

以下では、子育てを特徴づける因子として、関心、信頼、規範、自立の 4 つに、時間共有、叱られた経験の濃淡を加えた 6 つを用いる。6 つの因子（関心、信頼、規範、自立、時間共有、叱られた経験）のそれぞれについて因子得点に関する四分位範囲を求め、カテゴリ変数に変換した。第 1 四分位までを第 1 カテゴリー（低経験）、第 1 四分位と第 3 四分位との間を第 2 カテゴリー（中経験）、第 3 四分位以上を第 3 カテゴリーとしている。なお、「叱られた経験」は経験の度合いが「厳しさ」を表すと考え、3 段階を「厳しい」「やや厳しい」「全く厳しくない」と表現している。

本稿では、支援型、厳格型、迎合型、放任型、虐待型の 5 つを子育てタイプとして分析する。5 つのタイプは、次のように定義される。

- 1) 支援型：高自立、中自立、高信頼、高関心、高共有時間
- 2) 厳格型：低自立、中・高信頼、厳しい・やや厳しい、中・高関心、高規範
- 3) 迎合型：高信頼、中信頼、全く厳しくない、高共有時間、中共有時間
- 4) 放任型：低関心、全く厳しくない、低共有時間、低規範
- 5) 虐待型：低関心、低自立、低信頼、厳しい

それぞれの子育てタイプの人数を比較すると、表 5 のように、男女ともに迎合型が最も多

く 50%を越えている。そして、支援型、厳格型の順になる。迎合型が多いことは、明治時代初期の外国人の著作で、記述された日本の子育てに対する印象と一致している。

表 5 男女別子育てタイプ別比率

		男性		女性	
		度数	比率(%)	度数	比率(%)
タイプ	支援型	143	15.2	220	18.5
	厳格型	114	12.1	163	13.7
	迎合型	578	61.6	699	58.9
	放任型	68	7.2	48	4.0
	虐待型	36	3.8	56	4.7
	合計	939	100	1186	100

以上の子育てタイプで育てられた子供の、成人後の所得、幸福感、学歴を男女別に比較する。幸福感としては、Hills. and Michael (2002)で提示された質問リストを用い主因子法による因子分析によって「前向き思考」と「不安感（安心感）」の2つの因子を抽出し、因子得点を計算した。

図 1 と図 2 では、各項目の最大値が 25 となるように変換し、子育てタイプごとの成人後の所得、前向き思考、不安感、学歴をレーダー図によって示している。なお、不安感は、達成度において他の項目とは逆方向となっているため、安心感指標に変えてある。また、学歴については、学歴別にポイントを設定し、子育てタイプ別に平均ポイントを計算した。

図 1a と図 1b は、男性回答者のレーダー図である。支援型は、すべての項目で最も高い達成度を示し、前向き思考では他よりも圧倒的に高い。厳格型と迎合型は近い形状をしており、厳格型は所得で迎合型よりも高いものの、安心感では低くなっている。虐待型はすべての項目において最も低い達成度となっているが、放任型も虐待型と近い形状になっている点は注意する必要があるだろう。

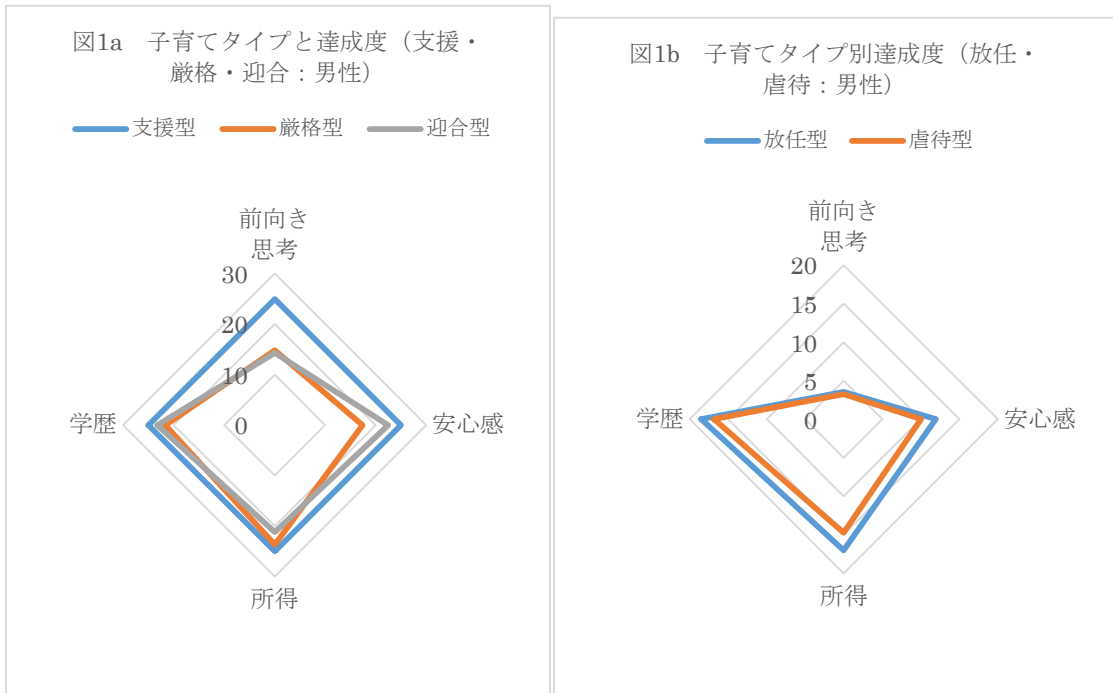
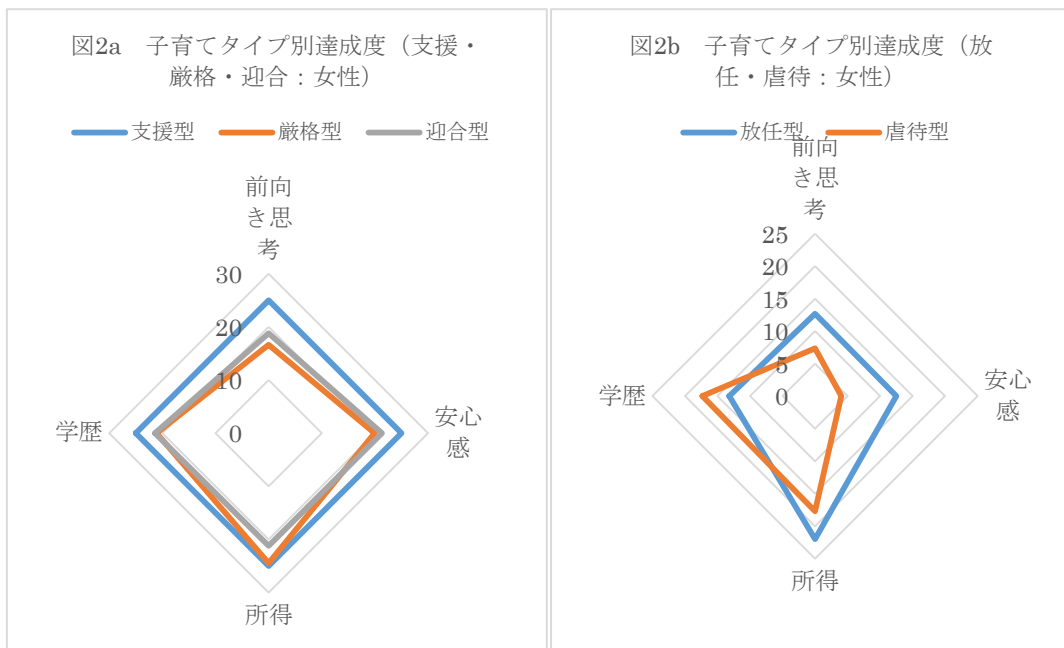


図 2a と図 2b は、女性回答者のレーダー図である。女性においても、男性と同様に、支援型がすべての項目で最も高い達成度を示している。男性と同様に、厳格型と迎合型は近い形状をしており、厳格型は所得では迎合型よりも高いものの、前向き思考および安心感では低くなっている。女性において特徴的であるのは、虐待型の前向き思考と安心感が、放任型とくらべても、大きく低くなっている点である。



4. 理想の男性・女性と父親・母親

4.1 子育てタイプ別分析

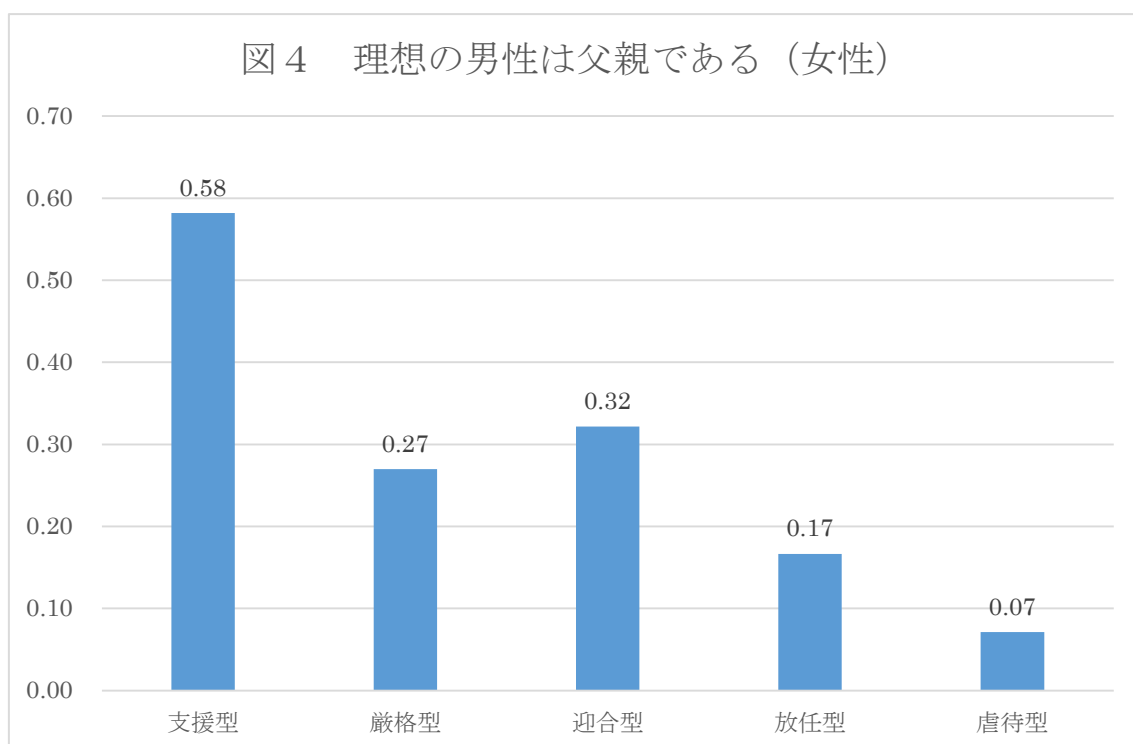
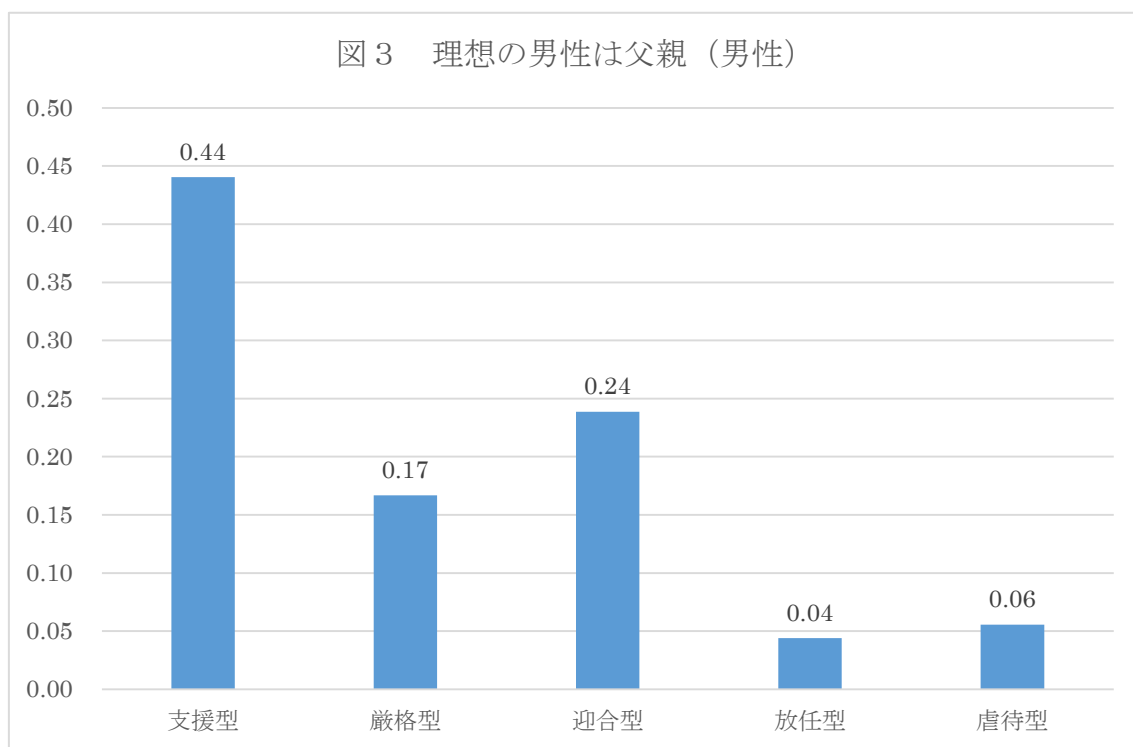
子育てのあり方が、父親や母親に対して持つ感情や、家庭をもち、子供を持つことに対する積極性に影響することはあるであろうか。我々は、父親が理想の男性であるか、母親が理想の男性であるかを質問した。具体的には、「理想の男性（女性）は父親（母親）である」という質問に対して回答してもらい、「ややそう思う」または「とてもそう思う」と回答した者の比率をタイプ別に計算した。図 3 は、父親が理想の男性であるかの質問に対する男性の回答の結果を示している。図で示されるように、支援型子育てタイプの男性は、厳格型子育てタイプの男性に比して、父親を理想の男性と考えている比率が高い。虐待型の子育てタイプでは、父親が理想の男性であることはほとんどないことが分かる。

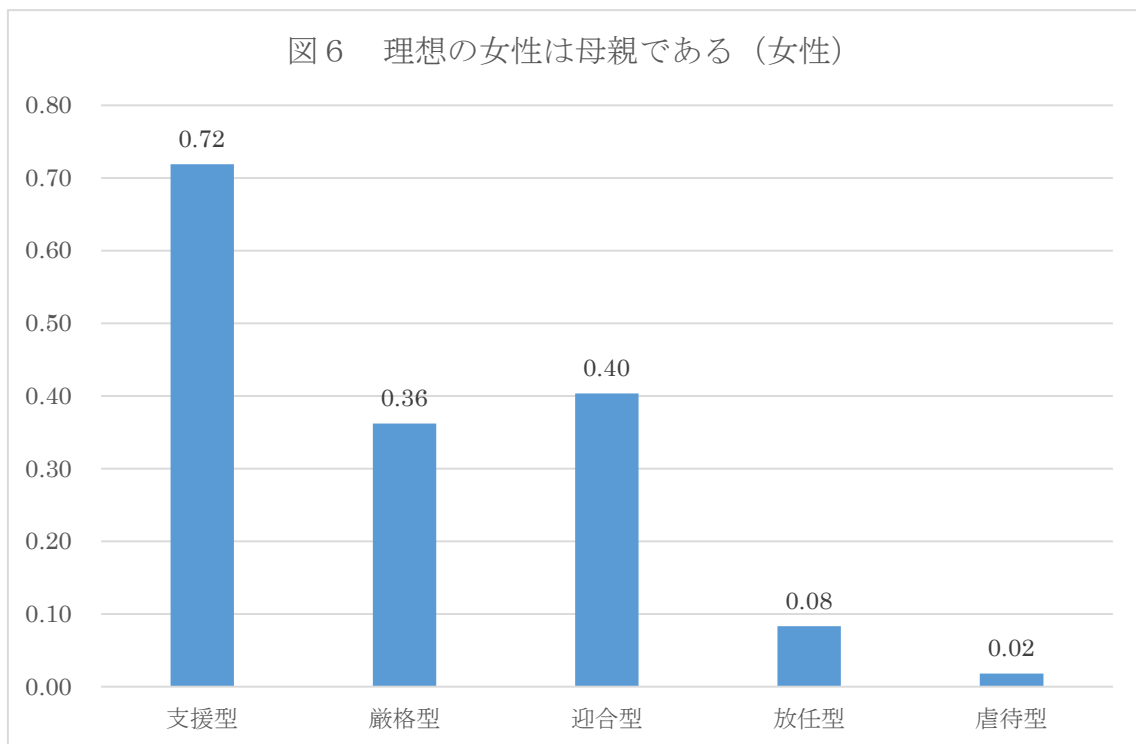
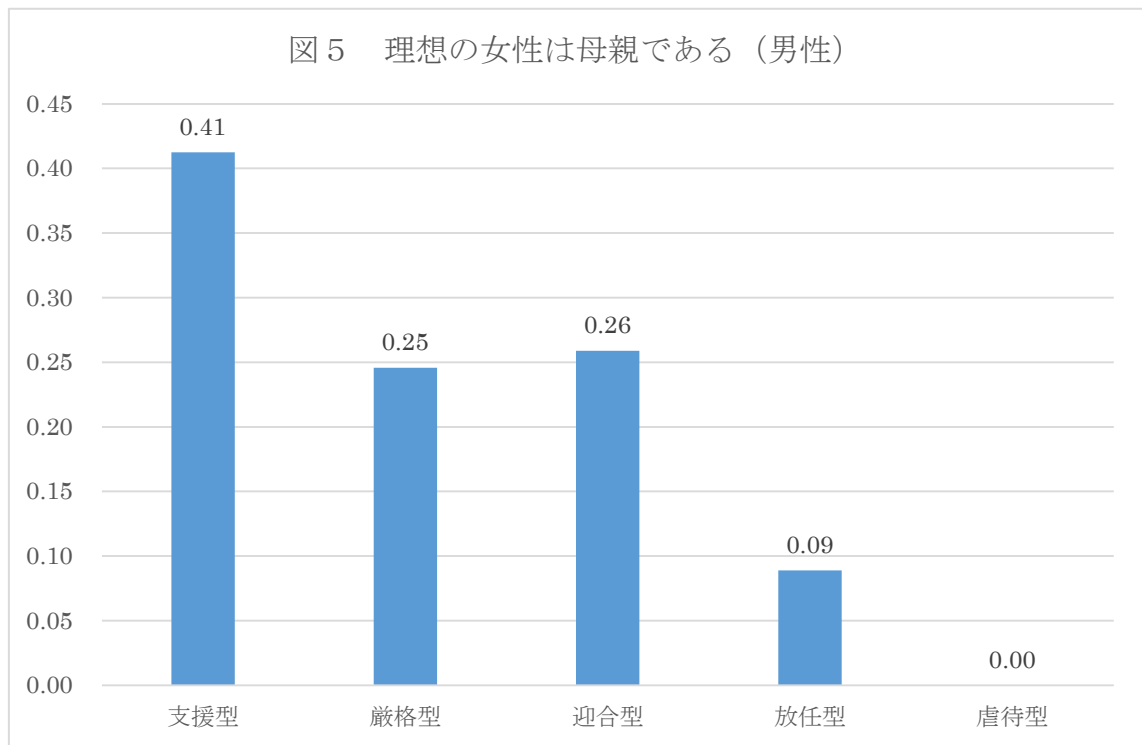
また、図 4 は父親が理想の男性であるかの質問に対する女性の回答の結果を示している。男性のパターンと近いパターンが確認でき、支援型子育てタイプの女性は、厳格型子育てタイプの女性に比して、父親を理想の男性と考えている比率が高い。

図 5 は、理想の女性が母親であるかとの質問に対する、男性の回答の結果を示している。支援型子育てタイプの男性は、厳格型子育てタイプの男性に比して、母親を理想の女性と考えている比率が高い。虐待型の子育てタイプでは、母親は理想の女性ではないことが分かる。

また、図 6 では理想の女性が母親であるかとの質問に対する、女性の回答の結果を示している。男性のパターンと近いパターンが確認でき、支援型子育てタイプの女性は、厳格型子育てタイプの女性に比して、母親を理想の女性と考えている比率が高い。

この結果から判断するに、父親および母親が、同性であるか異性であるかに関係なく、支援型において、最も良好な親子間の関係性が構築されていることが示されている。





4.2 婚姻行動

次に、「親を肯定的に見ている」ことが、「家庭を持つこと」、「子どもを持つこと」に対して影響を与えているかを調べる。この点を見るために、図7（および図8）では、理想の男性（女性）が父（母）と回答した人の中で、未婚・婚姻状況にある人のそれぞれの割合を年代別に示している。

これらの図より、父親を理想とする人は、あらゆる世代で既婚率が高いことがわかる。これに対して、母親を理想とする人は、若い世代でのみ、男女問わず既婚率が高い。これらの結果は、父親が理想の男性と考える人は、男性の場合は自分が夫である家庭を、女性の場合は配偶者である男性像を具体的にイメージしやすく、結婚に前向きになりやすいと考えられる。

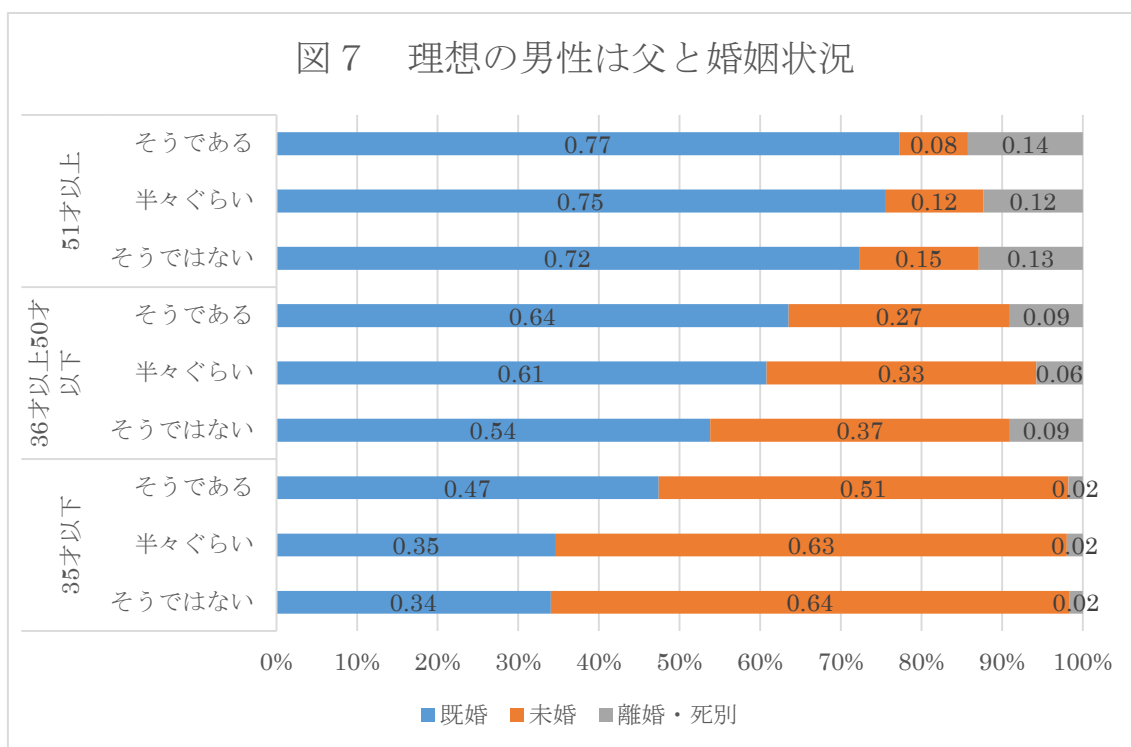
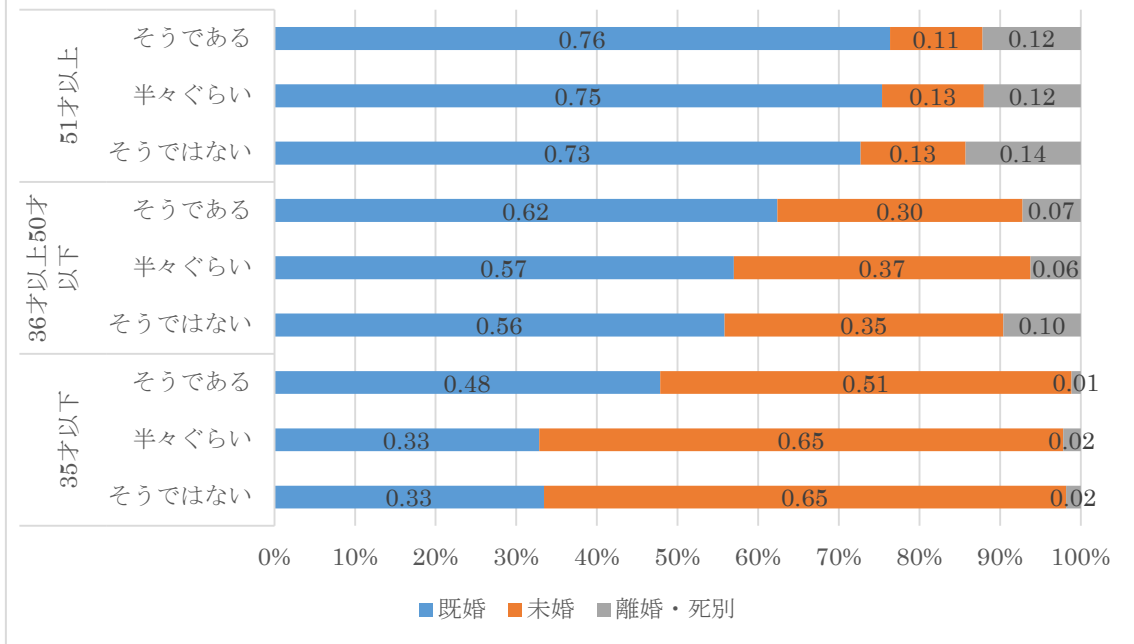


図8 理想の女性は母と婚姻状況



4.3子どもの数

親との関係は回答者の希望する子供の数に影響を与えているであろうか。表6、表7、図9および図10では、理想の男性（女性）が父親（母親）である程度別に希望する子どもの数を示している。

図表から示されているように、父親を理想の男性と考えている者は、そうではない者に比して、子どもを多く持ち、また、同様に母親を理想の女性と考えている者は、そうでない者に比べて、より多くの子どもを持ちたいと思っている。

これらの結果から、親を肯定的に見ているは、子どもを持つことに対して肯定的であることが示された。

表6 理想の男性は父の程度と希望する子どもの数

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差
そうである	1963	2.93	1.191	0.027
半々	3318	2.79	1.297	0.023
違う	4719	2.68	1.347	0.02
合計	10000	2.77	1.305	0.013

注：すべての差は1%有意水準にて統計的に有意

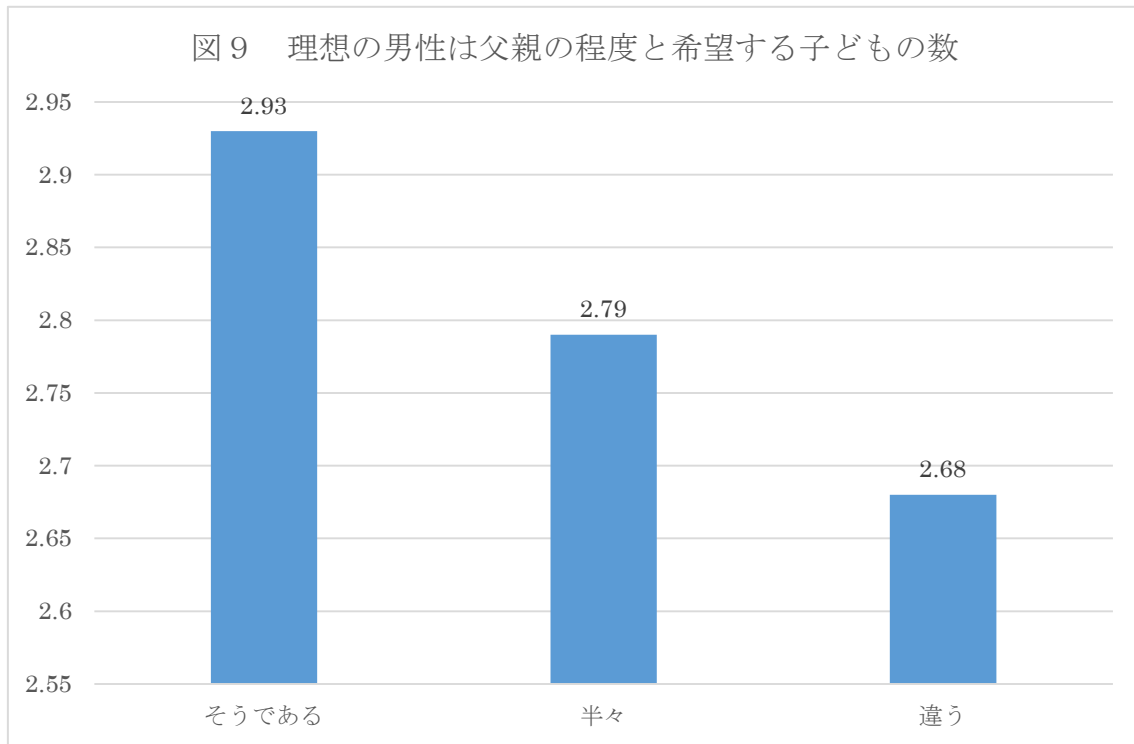
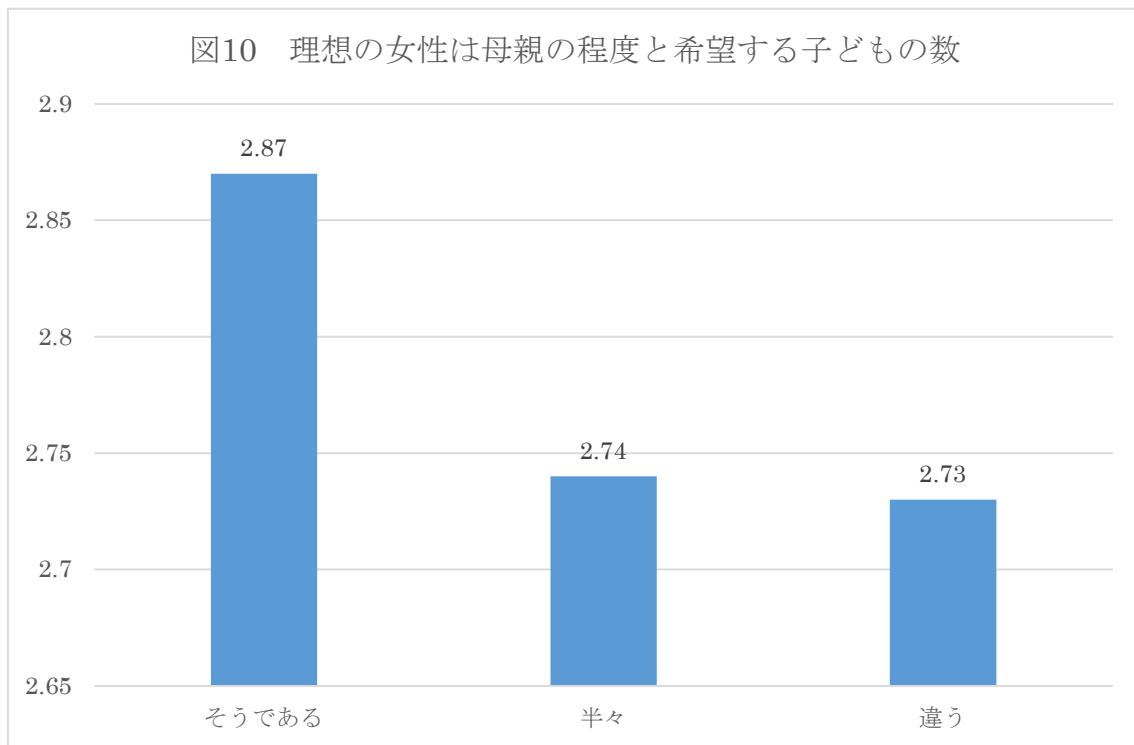


表7 理想の女性は母の程度と希望する子どもの数

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差
そうである	2341	2.87	1.176	0.024
半々	3425	2.74	1.329	0.023
違う	4234	2.73	1.349	0.021
合計	10000	2.77	1.305	0.013

注：「半々」と「違う」との差のみ非有意であり、「そうである」と「半々」および「違う」とは1%有意水準で差は有意である。



5. 子育てと親子関係

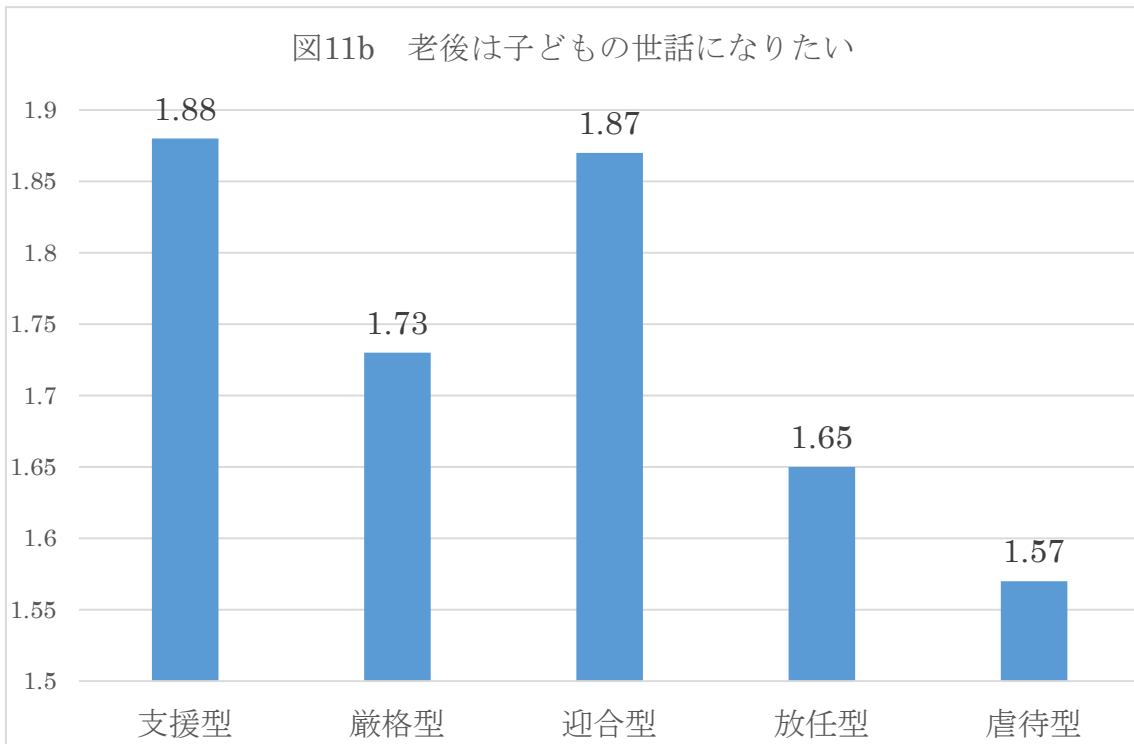
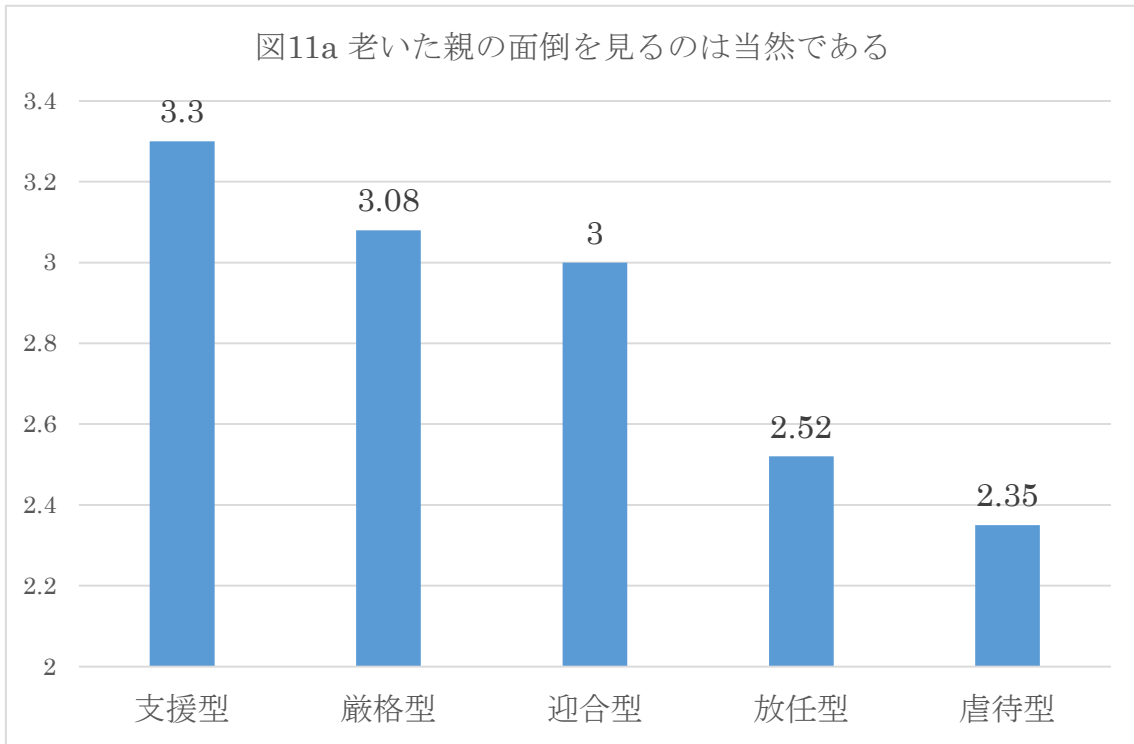
5.1 扶養意識

次に、自分が親の老後の世話をするという気持ちに、親から受けた子育てがどのように影響しているかを見てみよう。回答は4段階のリッカートスケール（「そう思わない」を1、「どちらかといえばそう思わない」を2、「どちらかといえばそう思う」を3、「そう思う」を4）を用いている。

図11aは、親を扶養する意識の違いを子育てタイプ別回答平均値を見ることによって示している。これらの図から示されるように、親の面倒を見ることに対して、支援型は最も高い値を取り、虐待型では最も低い値を取っている。厳格型は支援型よりも親の面倒を見ることの意識が低い。

一方、図11bは自分の子どもの世話になりたいという意識を子育てタイプ別に示している。支援型は最も高い値を取り、迎合型も高い。厳格型は子供の世話になりたいという意識は低く、虐待型では最も低い値を取り、放任型が厳格型と虐待型の中間である。

これらの結果は、支援型においては自分の親の扶養をする気持ちが高く、子供にも自然と期待することになることを意味する。厳格型は、親の世話をする意識が高いが、自分には厳しく、子供の世話にならない傾向がある。放任型、厳格型は、親の面倒を見る意識は低く、自分も子供の世話にはならない。迎合型は、親の扶養をする意識がそれほど高くないが、他の子育てタイプとの比較では、子供の世話になりたい気持ち大きい。



5.2 親の支配的態度が与える効果

ここでは、親の支配的、専制的態度が、子供に与える影響について分析する。支配的に接する親は、厳格型と虐待型であるので、その 2 つのタイプの子育てを受けた回答者を対象に分析する。

本調査では、「母は私が何か言うたびに、言い方を変えた」、「母は自分の話にすり替えるなどして、話を聞こうとしなかった」、「母は私の意見が自分たちの意見と違うと、否定してきた」、「母のことを愛しているなら、母を心配させるようなことはしない」、「母は私に対して優しく接したり、批判的になったりと対応が突如変わった」という 5 つの質問を行っている。これらの質問に対して、5 段階のリッカートスケール（「全くない」を 1, 「一度、もしくは時々」を 2, 「半々くらい」を 3, 「とてもよく」を 4, 「いつも」を 5）で回答を得ている。父親の態度に関しても全く同一の質問を行っている。これらの回答を主因子法による因子分析にかけると、1 つの因子が抽出された。この因子は、父親、母親の「支配度」あるいは「専制度」と解釈することができる。因子得点を計算し、得点の第 1 四分位以下を低専制、第 1 四分位と第 3 四分位の間を中専制、第 3 四分位以上を高専制と階層分けしている。

支配的な親が多い厳格型と虐待型について、支配的態度が子供の成人後の達成度にどのような影響を与えているかについて、母親、父親別に分析する。表 8 および図 12-1 から図 12-4 で示されているように、父親の専制度と母親の専制度が達成度に与える影響は異なる。厳格型の所得を見ると、父親が支配的であることは、若干所得を上昇させる。しかしながら、母親が支配的であることは、所得を引き下げている。

前向き思考については、厳格型であれば、父親、母親共に、専制度が高い場合に低い値を与えている。虐待型では、母親の専制度の違いが、前向き思考に大きな影響を与えていることが示されている。回答者はおしなべて後向き思考であるが、母親の専制度が低い場合のみ、後向きの度合いが小さくなる。母親の専制度が高くなるにつれ、前向き思考が大きく低下する結果は注目する必要がある。

不安感については、厳格型では父親・母親共に同様な傾向を示しており、より支配的になるにつれて不安感も増大している。虐待型では、おしなべて不安感が強いが、父親・母親の専制度が高い場合に、不安感が強まっていることが示される。

大卒以上学歴比率については、厳格型の父親に関しては専制度との関連性ははっきり見て取ることはできないが、母親の専制度が低い場合には大卒以上学歴比率が上昇している。虐待型に関しては、父親の専制度が低い場合に大卒以上学歴比率が高くなっている。母親の専制度は、大卒以上学歴比率に影響を与えていない。

以上の結果より、母親の専制度が低いことは、厳格型および虐待型において、達成度に対して正の効果を有していることが理解できる。

表 8 厳格型、虐待型別 父親・母親専制度別達成度（男女計）

	専制度合	厳格型父親	厳格型母親	虐待型父親	虐待型母親
課税前労働 所得(万円)	低専制	386.57	350.65	170.00	300.00
	中専制	387.62	334.04	257.89	150.00
	高専制	405.45	250.85	184.13	201.47
前向き思考	低専制	0.25	0.08	-0.75	-0.04
	中専制	0.03	0.15	-0.39	-0.58
	高専制	-0.06	-0.12	-0.67	-0.68
不安感	低専制	-0.22	-0.21	0.45	0.28
	中専制	-0.03	-0.08	0.78	0.84
	高専制	0.11	0.22	0.65	0.64
大卒以上比 率	低専制	0.51	0.49	0.50	0.33
	中専制	0.38	0.43	0.26	0.28
	高専制	0.49	0.42	0.32	0.34

図12a 厳格型タイプ・虐待型タイプ 父親・母親専制度別所得（有業者：単位万円）

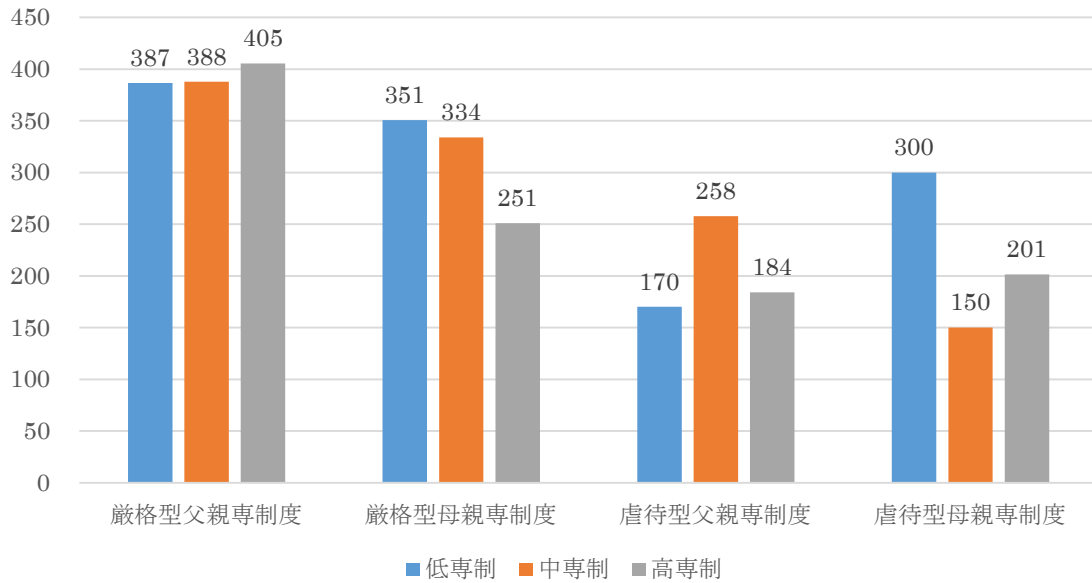
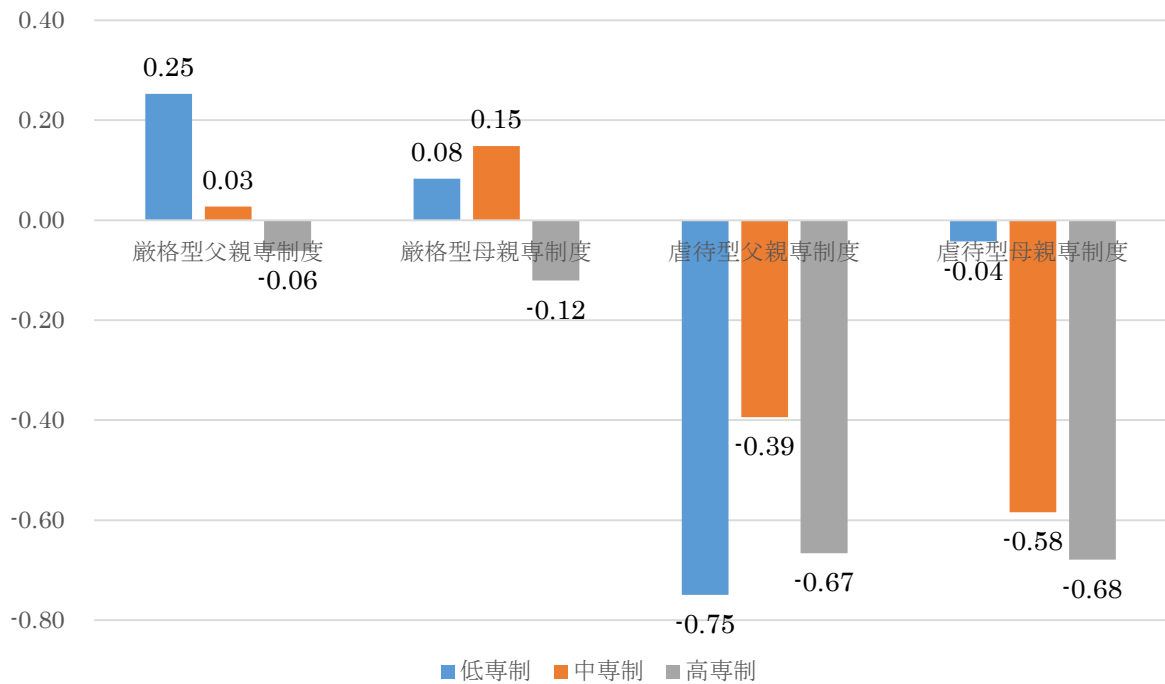
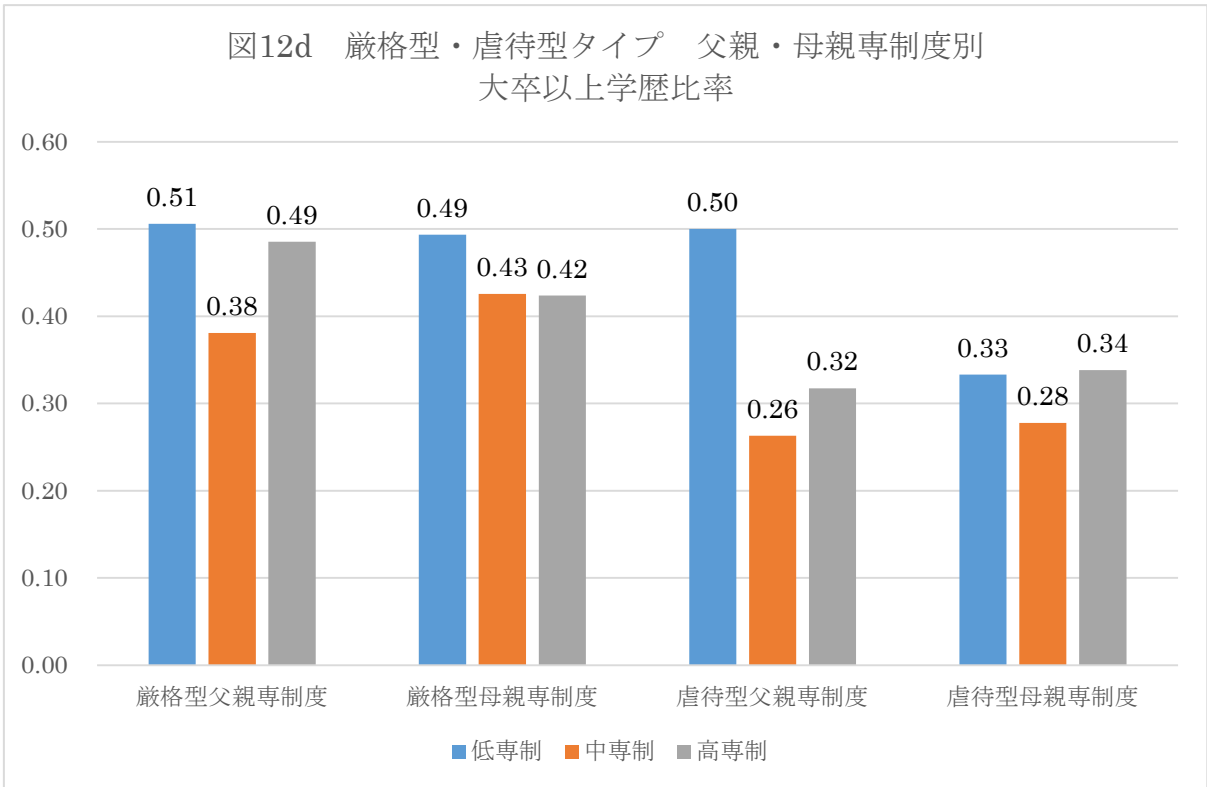
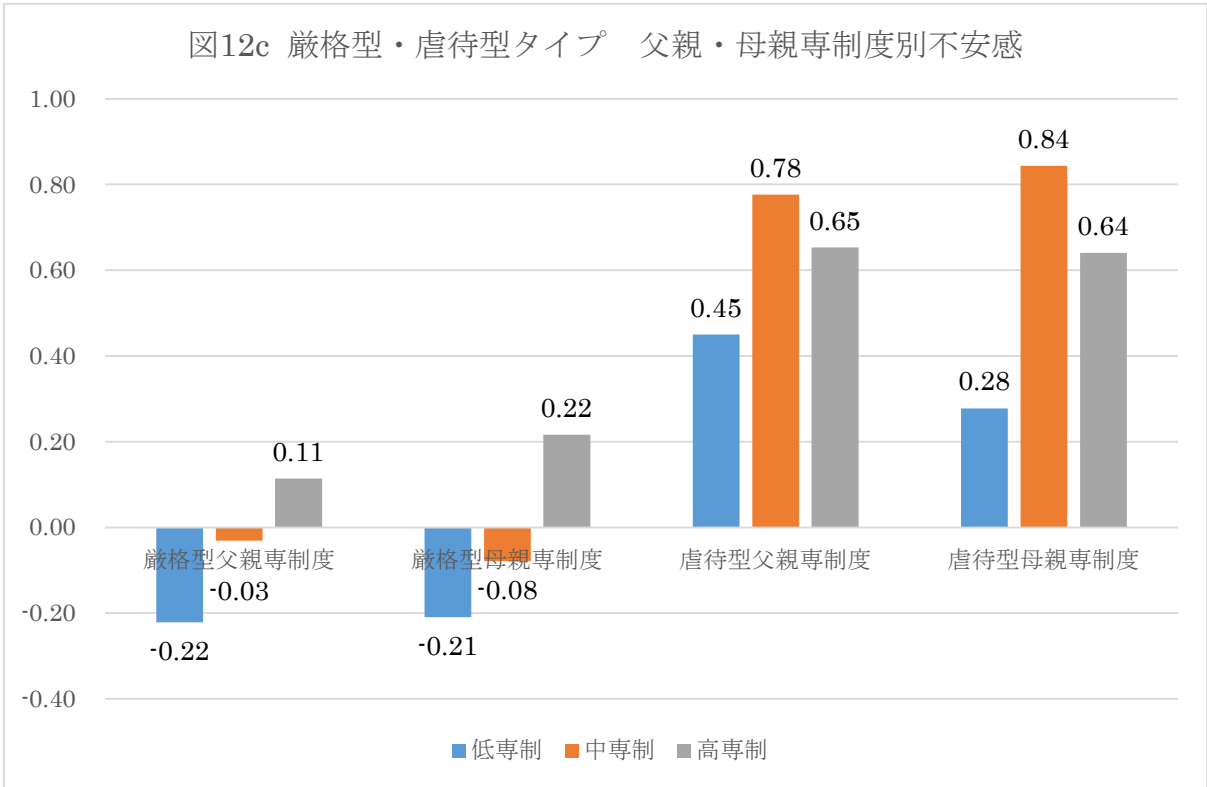


図12b 厳格型・虐待型タイプ 父親・母親専制度別前向き思考

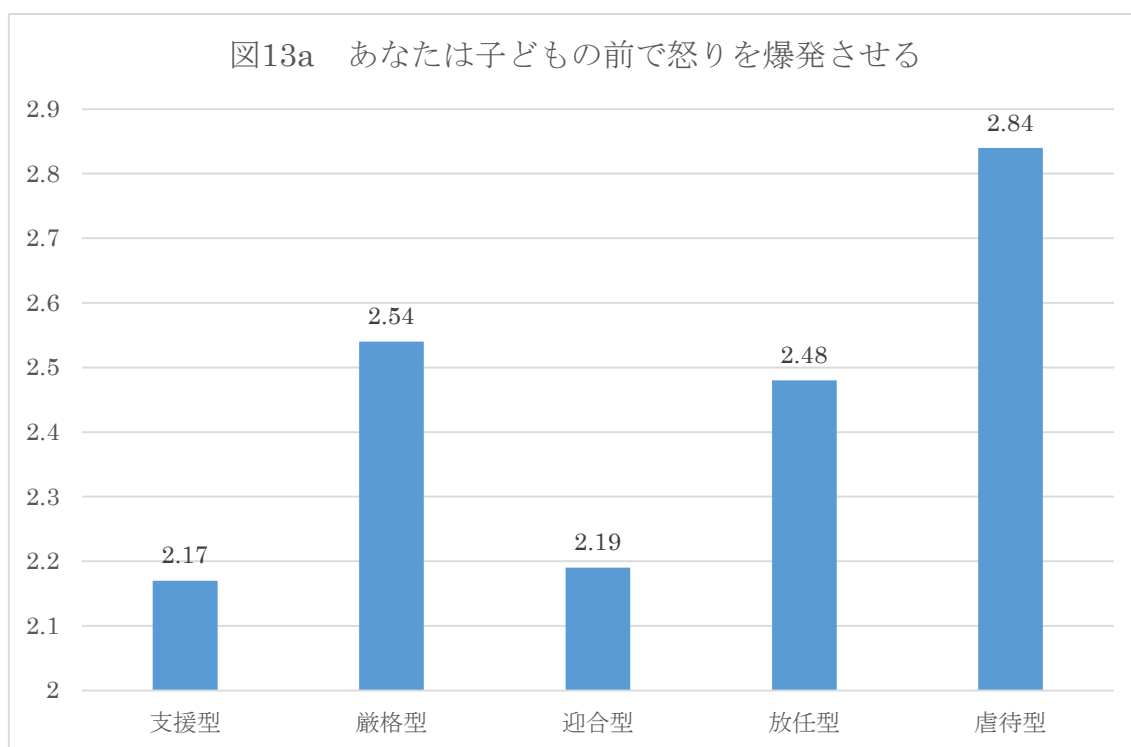




5.3 回答者自身の子供との関係

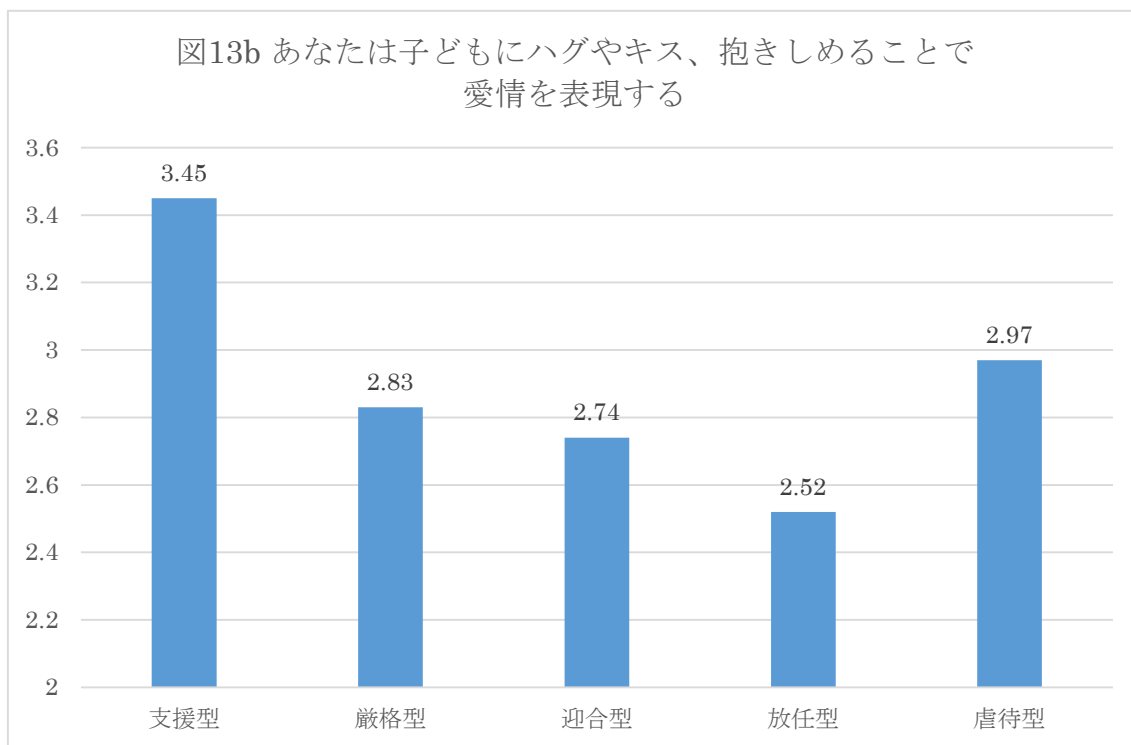
図 13a と図 13b では、回答者が受けた子育てタイプ別に回答者が自分の子どもとどのような感情的な関係性を形成しているかを示している。

図 13a は「子どもの前で怒りを爆発させる」ことがあるかどうかを聞いている。回答は 5 段階のリッカートスケール（「全くない」を 1, 「一度、もしくは時々」を 2, 「半々くらい」を 3, 「とてもよく」を 4, 「いつも」を 5）を用いている。タイプ別に回答の平均値を計算した結果を見ると、支援型や迎合型の子育てを受けた人は感情的な怒りを表すことは少ないことが分かる。厳格型と放任型の子育てを受けた人は平均以上に怒りを見せることがある。そして、虐待型子育てを受けた回答者は、感情的怒りを見せることが最も多いことが分かる。



次に、図 13b では、および「あなたは子どもにハグやキス、抱きしめることで愛情を表現する」という質問によって、回答者の自らの子どもに対する愛情表現の程度を聞いた結果である。回答は 5 段階のリッカートスケール（「全くない」を 1, 「一度、もしくは時々」を 2, 「半々くらい」を 3, 「とてもよく」を 4, 「いつも」を 5）を用いている。図から示されているように、支援型子育てを受けた回答者が、自らの子どもに対して最も愛情を持って接している。虐待型子育てを受けた回答者も自らの子どもに対しては多くの愛情を注いでいるのは、自ら満たされなかった愛情を子どもとの関係において回復させようとする

欲求を反映したものであろう。



6. 結語

本稿では、子供時代に親から受けた子育てのあり方が、成人後の結果にどのように影響し、そしてどのような親との関係をもたらすかを分析した。子育ての方法を、支援型、厳格型、迎合型、放任型、虐待型に分類すると、男女ともに、支援型の子育てを受けた子供が、将来において、他のタイプの子育てを受けた子供よりも、所得、幸福感、学歴で、高い成果を上げている。また、理想の男性（女性）が父（母）であると考える比率は、支援型の子育てを受けた回答者が最も高く、虐待型の子育てを受けた回答者は最も低い数値を示している。そして、理想の男性（女性）が父（母）であると考える回答者は、婚姻率が高く、希望する子供の数も高い数値を示した。親を扶養する意識は支援型が最も高く、虐待型が最も低い。厳格型、虐待型の子育ての場合、母親の専制的態度が強いほどは子供にマイナスの効果を与えることが示された。さらに、回答者とその子供との関係については怒りと愛情表現についての分析を行った。今後は、この分析をさらに深化させ、子育てのあり方の親子間の伝播について分析をする予定である。

参考文献

Armsden, G.C. and M.T., Greenberg, (1987), "The Inventory of Parent and Peer Attachment: Relationships to well-being in adolescence" *Journal of Youth and Adolescence*, 16 (5), 427-54.

- Barber, B. K. (1996), "Parental Psychological Control: Revisiting a Neglected Construct" *Child Development*, Vol. 67, No. 6, 3296-3319.
- Baumrind, D. (1967). "Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior". *Genetic Psychology Monographs*, 75(1), 43-88.
- Baumrind, D. (1968). Authoritarian vs. authoritative parental control. *Adolescence*, 3, 255-272.
- Bird, Isabella L. (1880) *Unbeaten Tracks in Japan*, Dover Publication, Inc. Mineola, New York.
- Chua, A. (2011), *Battle hymn of the tiger mother*, New York, NY: Penguin Press.
- Fulgini, J. A., V.Tseng and M. Lam (1999), (1999), "Attitudes toward Family Obligations among American Adolescents with Asian, Latin American, and European Backgrounds." *Child Development*, 70, No. 4 (Jul. - Aug., 1999), 1030-1044.
- Ge, Xiaojia, Karin M. Best, Rand D. Conger and Ronald L. Simons (1996), "Parenting Behaviors and the Occurrence and Co-Occurrence of Adolescent Depressive Symptoms and Conduct Problems", *Developmental Psychology* Vol. 32, No. 4, 717-731.
- Hills, P. and A. Michael (2002), "The Oxford happiness questionnaire: a compact scale for the measurement of psychological well-being," *Personality and Individual Differences* 33, 1073–1082.
- Kim, Su Yeong, Yijie Wang, Diana Orozco-Lapray, Yishan Shen, and Mohammed Murtuza (2013), "Does 'Tiger Parenting' Exist? Parenting Profiles of Chinese Americans and Adolescent Developmental Outcomes," *Asian American Journal of Psychology* 4, No. 1, 7–18.
- Maccoby, E. E., & Martin, J. A. (1983). Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. In P. Mussen (Ed.) *Handbook of Child Psychology* Vol.4. New York: Wiley
- Meares, Paula A., Juliane Blazeovski, Deborah Bybee, and Daphna Oyserman (2010), "Independent Effects of Paternal Involvement and Maternal Mental Illness on Child Outcomes," *Social Service Review* Vol. 84, No. 1 (March 2010), pp. 103-127.
- Morse, E.S. (1885) *Japanese Homes and Their Surroundings*, Harper, New York
- Nishimura, Kazuo. Junichi Hirata, Tadashi Yagi, Junko Urasaka(2016)"Basic Morality and Social Success in Japan", *Journal of Informatics and Data Mining*1, No.1,
- Netto, C. A. and Wagener, G.(1901)*Japanischer Humor*, Brockhaus, Leipzig
- Sriram, Rajalakshmi and Prachee G. Navalkar (2012), "Who is an 'Ideal' Father? Father, Mother and Childrens' Views", *Psychology and Developing Societies* 24(2) 205–237.
- Zak , P.J.(2012)*The Moral Molecule: The Source of Love and Prosperity*, Dutton Adult, New York

西村和雄・平田純一・八木匡・浦坂純子（2014）「基本的モラルと社会的成功」、独立行政法人経済産業研究所, **RIETI Discussion Paper Series 14-J-011**.

西村和雄・八木匡（2016）「西村和雄・八木匡（2016）「子育てのあり方と倫理観、幸福感、所得形成－日本における実証研究－」独立行政法人経済産業研究所, **RIETI Discussion Paper Series 16-J-048**.